

⑤ 宮城県南三陸町／伊里前福幸商店街 高橋武一さん

津波で機能喪失した町に 全国から温かい応援が



食糧品や日用品雑貨を扱うマルタケ大衆ストアは、仮設店舗と軽トラを使って商店街で営業する

かつては風光明媚な漁師町だった南三陸町の歌津地区。津波ですべてが流されてしまったが、希望の光となるべく地元の商店主たちが立ち上がった。移動販売から始め、わずか9カ月で仮設商店街をオープン。その商店街を中心に全国へ意外な輪が広がった。さまざまな応援を背に、商店主たちは完全復興をめざす。

リアス式の海岸線を持つ南三陸町は、度重なる津波の被害を被ってきた。近年でも1933（昭和8）年の昭和三陸大津波、1960（昭和35）年のチリ地震津波で大きな被害を受けている。防波堤や防潮堤が設置されていたが、東日本大震災で町は壊滅的な被害を受けた。海に面した市街地はいまま瓦礫が残り、復旧工事に追われている。

一方で復興に向けて着々と歩んでいる人たちもいる。その一例が歌津地区の伊里前福幸商店街、旧・伊里前商店会の人々だ。2005年に志津川町と合併

伊里前福幸商店街は規模は大きくないが、なかにある公衆トイレは、仮設とはいえすべて温水洗浄便座になっている。このような集客のためのかゆいところに手が届く試みが、観光客や女性客に喜ばれている。

して南三陸町となるまで、歌津町の中心だった歌津地区は、合併後も南三陸町の人口の約3割が集中する風光明媚な漁師町だった。市街地を貫いていたのが、33軒の店舗からなる伊里前商店会。大型スーパーのない歌津では住民に愛された商店街だった。背後の高台には、多くの住民が避難した伊里前小学校の校庭が広がる。震災の約1ヵ月後、天皇・皇后両陛下が初の被災地視察のためへりで降り立ち、海に向かって黙礼をされたのがこの校庭。両陛下の眼下に広がっていたのが伊里前商店会の跡だ。



マルタケの店内には震災前後の町の様子を撮影した写真が飾られている



商店街の組合長を務めるながら、スーパーの営業を続ける高橋武一さん

**公民館の駐車場跡地に
ユニット仕様の商店街開く**

東日本大震災ですべてを流されてしまった伊里前商店会だが、すぐ裏手にあった歌津公民館の駐車場跡地で商店街を再開する。ユニット仕様の仮設商店街だが、

食品スーパーやスポーツ用品店、理髪店など10店舗が入居。毎週火曜日は仙台銀行がトラックを改造して作った移動店舗で営業。住民が集まるオアシスのような場所になっている。

もっとも町内は交通事情が悪く、J R気仙沼線の歌津駅も線

路ごと流された。マイカーを流されてしまった住民も多く、仮設住宅で、移動手段も限られた生活が続く。そこで活躍するのが軽トラによる移動販売だ。

「会員から、うちも軽トラを使いたい」というリクエストが殺到しています」と南三陸商工会の畠山明博経営指導員は語る。同商工会では563会員のうち、463の事業者が津波による被害を受けた。移動販売は住民にとって、なくてはならない存在になっている。

福幸商店街でも全国連の支援による軽トラがフル稼働。

「震災時は店舗兼自宅にいて、そこから店の車を運転して津波から逃げました。だから唯一残った資産が車1台なんです。朝は私がそれで仕入れに行くのですが、従業員も保育所やデイサービスセンターに給食の配達に行かなければならない。そこで商店街の軽トラを使っています」

そう語るのは福幸商店街の組合長も務めるマルタケ大衆ストアー代表取締役の高橋武一さん

(63)。昼は軽トラに食品を積み、仮設住宅を巡回、震災で買い物が不便になった山間部へ向かう。他の商店も仕入れや納品で1台の軽トラを活用している。

店主とボランティアが一緒に物資を配布

伊里前商店会は震災後、解散も考えていたが、ある出会いが流れを変えた。歌津地区の復興支援物資を届けていたNGO・アジア協会アジア友の会の担当者、元商工会の経営指導員で、支援物資を配布する方法として、地域に明るい商工会員を通すことを発案。店主が物資の配布を行うようになったのだ。

「救援物資を配っていると、伊里前商店会がなくなって困っているという声をたくさん聞きました。顔なじみのお客さんからお叱りも受けました。みんながモノを買えずに困っているときに、商店会は一体何をやっているんだと。あなたたちが頼りなのだ、早く復活してほしいという、期待の叫びに聞こえました」



この地の名物、切子で作った看板が商店街の目印だ



店主が集まって定期的に行われる運営ミーティング

高橋さんの呼びかけで、結局7軒の店主が集まり、伊里前商店会の再興をめざすことに。まず仮設住宅への移動販売を行い、売上の一部を運営資金として積み立てた。中小企業基盤整備機構からユニットハウスの提供を受け、震災から9カ月後の

12月13日に「南三陸町歌津伊里前福幸商店街」をオープン。福幸という文字に復興への気概を込めた。現在では10店舗が営業し、利用客の4割が観光客やボランティアなど県外からの訪問者。地元住民と訪問者をつなぐ場所としても機能している。

徳島の大漁旗に続いて

サッカーや野球の応援旗が翻る

福幸商店街の取り組みは注目を集めている。なかでも全国的

に知られるのが、大漁旗ならぬサッカーの応援旗の掲揚だ。



なでしこリーグ、Jリーグ、プロ野球など、全国から寄せられた応援旗が南三陸町の空にはためき、復興を後押しする



トラックを改造した銀行の移動店舗。週1回福幸商店街に巡回する

実は福幸商店街のオープン当初は、徳島県から借りた大漁旗がはためいていた。昨年5月に返却期限がきたため、仕方なく撤去。大漁旗のなくなった商店街は、無機質なユニットハウスだけが目立ち、あまりにも殺風景だ。商店街の目の前は国道45号。被災した地元住民やボランティアが通るだけに、少しでも明るく目立つ商店街でありたい。といって装飾にける予算もないので、ツイッターで「何か目立つ旗があれば送ってください」

と呼び掛けたところ、南三陸町出身で仙台市在住の女性が、応援する女子サッカーチーム、ベガルタ仙台レディースの応援旗を送ってくれた。他のチームのサポーターにも呼び掛けてくれたおかげで、全国からさまざまな応援旗が届いた。その後、JリーグからJFLなど地域チームにも広がった。町内のしおかぜ球場で東北楽天の2軍が試合をしている縁で、プロ野球チームからも旗が送られてきた。

大漁旗には必ず寄贈主と船の名前が記されている。送ってもらう応援旗にも名前やメッセージを書いてもらった。なかには選手のサインやメッセージが書かれているものもある。また遠方から商店街に応援旗を直接持ち参したり、送ってくれたサポーターが「旗が実際に掲げられているところを見てみたい」と旅行がてら訪ねてくることも多い。

高橋さんは歌津に再び商店街を作りたいという。浜風にたなびく色とりどりの応援旗が、復興への合図のように見えた。